
涙鬼- r u i k i -

羽村奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙鬼 -r u i k i -

【Zコード】

Z5138D

【作者名】

羽村奈留

【あらすじ】

由希子は高校生。火事に巻き込まれ青年に出会うが・・・。
(完結しておりますので、誤字脱字の修正のみとなっております)

「うひちだ」
床に座っている由希子には、手がしゃべり自分を呼んでいるように見えた。手の後ろには、由希子を見下ろして立っている青年がいる。顔はハンサムでもなければ不様でもない。どこでてくる普通の顔である。青年に特徴があるとすれば長い髪。後ろで一つにまとまり青年の動きに合わせて背中で揺れている。

「早く逃げよ」
「ひで？」
「なんで？」
戸惑う由希子の手を青年は掴んで引っ張った。
「何を言つてるんだ。この状況が判らないのか」「え？」

由希子はショートヘアを揺らして辺りを見回す。煙が通路に流れ込んできている。

「煙……」

青年は更に手を引っ張つて由希子を立たせた。

「火事だつて言つてるだろ。何度言つたら分かるんだ」

青年は二十歳前後。上は白のシャツ、下は青のジーパンをはいでいる。青年は由希子の手を引っ張つて走らせようとするが、由希子は走らない。

「私の友達が……。さつままで一緒にいたの」

由希子が走らないため、走ろうとした青年は自ら繋いだ由希子の手に引っ張られるようにして仰け反つた。青年が顔をしかめる。「いねえよ。見れば分かるだろ」

振り向き様の表情で、青年がどれほど苛立つているのかが分かる。由希子は青年の手を振り解いた。セーラー服のスカートが揺れる。

「友達を探さないと」

「いないんだから必要ねえよ。さつと逃げたんだろ」

「そんな事分からぬじゃない」

青年は腕を掴んで由希子を歩かせる。

「（）にいなければ先に逃げたと思うのが普通だろ。それから後ろの火の中だ」

青年が指をさした先を見るために、由希子は振り返った。少し先に渦を巻く真っ赤なものがある。真っ赤な渦までまだ距離があるのに、由希子の顔を照らし熱い空気が頬を撫ぜる。真っ赤な渦は炎だつた。

「いやあー」

由希子は一目散に逃げ出した。由希子の腕から青年の手が外れる。

「おい、助けに来たオレを置いて行くな」

青年は由希子を追いかけて走り出す。

「闇雲に逃げるな。危ないぞ」

青年の忠告を聞かず由希子は必死に走つて逃げるが、その先は行き止まりになつていた。

「シャッターが下りてる。私達がいるのに」

由希子はシャッターを見て怒る。

青年は由希子に追いつく。

「高熱を感知したら自動で防火シャッターが下りるんだよ」

青年は左右を見ている。

「大丈夫。シャッターが下りている時は、こっちの通り抜け用のドアから行ける」

青年は右にあつたドアを開けるがすぐに閉めた。

「ドアの向こうはダメだ。凄い勢いで燃えてる」

由希子はドアに触れて言つ。

「でも、そんなに熱くないからあんまり燃えてないんじゃない。通れる逃げ道があるかもしれないのに、探さないですぐドアを閉めるなんて」

由希子は青年の制止を聞かずドアを開けた。

「あひつ

真つ赤な炎が目の前で渦を巻き、火傷しそうになつた由希子はすぐには戸を開めた。青年はしかめつ面で由希子を見る。

「開けるなよ。防火シャッターは熱も遮断するよつて作られてるの」

「そういう事は先に言つてよ」

「普通分かるだろ」

その間にも炎は刻々と一人に迫る。青年は言い合ひをしている暇は無いと由希子から視線を外し、逃げ道を探して周りを見回す。

由希子は、助けられたのだが、青年の言い方が気に入らない。

「なんなの、あの人」

胸に溜まつた鬱憤を溜め息と一緒に出してから、熱風が当たつた腕を撫ぜて、心中に突然湧いた死への恐怖を忘れるために、由希子は青年と一緒になつて周りを見回す。

「一体ここはどこなの？」

「どこのテパートの十二階だろ」

二人は田を合わさずに、逃げ道が見つからない苛立ちをぶつけ合つている。

「テパートですつて。殺風景な通路で何もないじゃない」

由希子の声が裏返る。青年は手当たり次第にドアノブを回して鍵が開いているドアを探す。

「しつかりしてくれよ。ここは従業員専用の通路だろ」

由希子は混乱する。

「私こんな所知らない。友達といったのは……。えっと、えっと……。そんな、思い出せない」

「お客さんかよ。あんたは逃げているうちに友達とはぐれて、迷つてここに来てしまったんじゃないのか？」

青年は、目につくドアに行きドアノブを回しているが、どれも開かない。

「なんでどれも鍵がかかっているんだ」

由希子は考え込んで立ち尽くす。

「私、友達と買い物に来てたつて事？」

「知らねえよ。なんでオレに聞くんだ」

言い合いをしていくうちに、いくつ目かのドアが開く。

「お、開いた。こつちは燃えてない。行くぞ」

「行くつてどこへ?」

青年は棒立ちになつていて由希子の手を掴んだ。

「火の無い所。逃げるんだよ」

青年に引つ張られて由希子はドアを潜つた。

青年と一緒に走る。ハンガーにかけられた婦人服が列になつていても並んで見える。天井からはバーゲンの垂れ幕が下りている。青年の言う通りデパート内のことだ。その婦人服を避けて通り、少し広い通路を見つけて走る。次に見えたのはベルト売り場、その隣はアクセサリー売り場になっている。

由希子は、少し冷静になつた事もあつて、現状を受け入れられるようになってきた。

「この先にエスカレーターがある。そこを下りて行けば一階に行ける」

「うん」

青年の言葉に、由希子は素直に返事をする。

アクセサリー売り場の次は宝石売り場がある。店の名前があるところを見ると、デパートのスペースを借りて出店している宝石店のようだ。そこにオレンジ色の防火服を着た消防士が三人いた。由希子はこれで助かると思った。

消防士は三人とも宝石が並んでいるガラスケースを見ている。その一人が腕を振り上げて、分厚いグローブに包まれた拳を振り下ろした。ガラスが割れる音がする。

火事に怯えて逃げる由希子にとって、その音は由希子の身を震撼させるほど、過ぎた音だった。

「きやあ」

由希子の悲鳴に三人の消防士は振り返った。

青年はすぐに言う。

「助けて下さい。オレ達逃げ遅れて」

だが、言いかけた言葉を途中で飲み込んだ。なぜなら三人の消防士の表情が異様だったからだ。本来なら消防士の誘導に従つて逃げなければならない。なのに、三人の消防士から恐怖ともいえる緊張

が感じられるのはなぜだろうか。

急に立ち止まつた青年の背中に由希子はぶつかる。

「もう、急に止まらないでよ」

青年の顔を睨んで見るが、青年はその先にいる消防士を凝視している。

「ちょっと、どうしたの？」

由希子は青年から消防士へ視線を変えた。

ちょうど、消防士の一人が手斧を持ち上げ肩に載せたところだった。次に隣の一人がハンマーを持ち上げる。そして最後の一人がサバイバルナイフを持ち上げた。

「オレら大変な時に来たみたいだ」

「え……！？」

言つた由希子も、なんとなく良くない雰囲気というのだけは分かれる。

動き出した三人の消防士を見て、青年は声を上げた。

「逃げるぞ」

青年は来た道を逆戻りして走り出す。

当然、由希子も引つ張られて走る。

「なんで？ 顔が怖い消防士さんだけど、話せば分かるんじやあ

「あいつらは火事場泥棒だ」

「えー！ そんな、だつて消防士の恰好をしてるじゃない」

「偽者だよ。消防士の姿をしていれば泥棒に見えないだろ。火事もきつとあいつらがやつたんだ」

由希子達はベルト売り場を右折する。

それを見て消防士の一人が右に外れて走り出した。回り込んで由希子達を捕まえるつもりのようだ。

由希子が振り返りながら言う。

「後ろの消防士さん一人しかいない

「なんだって！」

青年も後ろを振り返る。

「いかん、一人が回り込んで来る」

行く手を阻まれた青年は立ち止まり、一人と二人の男を交互に見ながら、次の逃げ道をも探す。その青年の手が商品のベルトに触れて、ベルトが音を立てて揺れる。しかし、逃げ道は見つからず、先ほど潜つたドアを背に由希子達は消防士三人に囲まれた。

由希子は青年の後ろから顔を出した。

「あの私達、怪しい者じやありません」

「ムダだつて」

止める青年を由希子は横目で睨んで言つ。

「話せば分かるかもしないじゃない」

由希子は笑顔になつている消防士に言つた。

「火事の逃げ道を探してるのはなんですか」

一人の消防士が声を出して笑い出した。

「怪しい者じやありません。だつて」

残りの二人も声を出して笑う。

「確かにそうだ」

「だつて俺達が怪しい人だから」

青年はうろたえる足を一步前に出して言つ。

「やつぱりお前ら、火事場泥棒だろ」

それを聞いて三人の笑顔が消えた。手斧を持つた男が言つ。

「見てたんだ」

由希子は急いで手を振る。

「見てません、見てません。ガラスを割つた時はいたけど、それだけではほかは何も見ていません」

由希子の言葉を聞いて、三人は顔を見合させた。サバイバルナイフを持つた男が言つ。

「最初から見てたんだ」

ハンマーを持つた男も言つ。

「やっぱりここで燃えてもらうしかない」

手斧を持つた男が反対の手に斧の柄を落とし、リズムをとりながら

う言ひ。

「だね」

由希子と青年は息を飲む。同時に回れ右をして後ろのドアに向かつて走りだした。こうこの時の一人は息が合つらし。

「そつちは燃えてるよお～」

三人の誰が言つてゐるのか分からぬが、氣持ち悪い声が聞こえてくる。

由希子と青年は同時にドアノブを掴んだ。

「ドアが開かない」

焦る由希子に青年は頭^いなしに怒鳴る。

「逆に回してくるからだ」

由希子は怒りの眼で青年の顔を見た。

「何やつてんのよ

「お前が逆なんだよ

「うそ」

「つそじやねえ。早く手を放せ」

由希子はドアノブから手を放した。肝心な時に息が合はない。

青年は急いでドアを開ける。由希子と青年は同時にドアを潜つた。

しかし、由希子だけが顔を歪めて後退りをする。

「いやあー、引っ張らないで」

サバイバルナイフを持った男が由希子の髪を掴んでいたからだ。二人の所へ引きずつて行く。

「殺す前に、こいつで楽しもうぜ」

青年は急いで引き返す。

「やめる」

近くにあつた服がかかっているパイプを掴んで服ごと三人に投げつけた。それから一、三本のパイプを、かかっている服ごと投げつける。

男達に服がかかり、男達は前が見えなくなつて服を^か引き分けている。

当然、由希子にも服がかかり、由希子も服を搔き分けている。

青年は由希子の手だけを掴んで引っ張り出した。

「こっちだ」

由希子の頭にハンガーが入つた服が載つてゐる。由希子は見る事もなくそれを投げ捨てる。

「ハンガーが頭に当たつて痛いじゃない。ほかの方法は思い付かなかつたの」

「考へてる暇なんかねえよ」

言い合いをしつつも由希子と青年の手はまだ繋がつてゐる。青年が先にドアを潜り、由希子を引っ張る。

「早く來い」

由希子も急いでドアを潜り、青年は由希子の後ろを見て、向かつて来る男達を遮る^{ささえ}ように急いでドアを押した。

突然、手斧が突つ込まれる。突つ込まれた手斧がドアに挟まつて完全に閉める事ができない。斧の刃が左右に回転して動きドアをこじ開けようとしている。ドアの隙間からは血走つた男の目が覗いて由希子を見ている。

由希子は目の前で動く斧の刃を見て叫んだ。

「きやー」

「耳元で叫ぶな。力が抜けれる」

青年は必死にドアを押して、これ以上ドアが開かないようにしている。きっとドアの向こうでは三人の男が押しているに違いない。由希子は手で自分の口を押さえて黙つた。分かったと頷くが、ドアを押している青年には見えていない。青年は顔を真つ赤にしてドアを押している。だが、三対一では力の差は歴然。ドア向こうの三人に押し返されて、青年の踏み込んでいる足が床を滑つて少しづつ後ろに下がりだした。

「ダメ、負けないで」

由希子も一緒になつてドアを押すが、女性一人の力が加わつても三人の男の相手にはならない。

由希子と青年は押し返されて、ついに開いたドアから男が一人入つて来た。手斧を持った男である。

「こつちに来るな」

青年は手斧を掴んで男を押し返し、男は由希子が押しているドアに挟まれた。

「いてえー」

痛みで男の力が抜けた時に、青年は男から手斧を奪い、足で男の腹を押した。

手ぶらになつた男はバランスを崩して体が後ろに傾く。すぐ後ろにいた、サバイバルナイフの男が倒れてきた男に気付く。ビックリ眼で男を掴んで支えるが、サバイバルナイフを持つていては両手が使えない。足で押されて勢いがついた男を片手で受け止めるが支えきれず、男を抱いたまま後ろでドアを押していったハンマー男に倒れ込んだ。ハンマー男はドアを押すのに必死になつていた事もあって、押している姿勢のまま顔だけが一人の男に向けられ、

「何をやつているんだ」

と言つた直後に事の次第に気付き、驚きの表情をした状態で倒れてきた二人とぶつかるようにして、三人は将棋倒しになつた。

青年は手斧を持って肩でドアを押して由希子と一緒にドアを閉めた。由希子はまだ必死にドアを押している。

「「こんど来たら、エリナがおひ

「騒ぐな

青年は由希子の不安を押さえ込むよつこして言つてからドアに耳をつけた。「一」という振動音に混じつて低い男の声が聞こえてくる。

「斧を取られた

「何やつてんだよ

「なあに、相手はガキ一人だ。何もできやしなこれ」

「そ、そうだな」

どもつているのが、斧を取られた男だらうか。

「向こうの様子はどうだつた?」

「壁と天井が燃えていた。ここまで距離はまだあるけどな」「待とう。ガキとはいえ手斧を持つていて。下手な戦いは避けたほうがいい。なあに、待つていれば熱さに我慢ができなくなつて、ガキの方からこっちに来るさ」

「焼け死んでくれるかもよ」

「そいつは困る。女は生き残つてくれないと」

「いやらしい奴だな」

「俺が? それは小娘の味を教えたこいつだろ」

「俺を指さすなよ」

三人の笑い声が聞こえる。

青年はドアに背をつけてもたれた。手斧を持った腕が力を無くしてぶら下がる。

「もうドアを押さなくていいよ」

「なんで?」

「あいつら、オレ達をあぶり出すつもりだ」

青年はドアにもたれたまま床にしゃがんだ。ドアと背中の擦れる音がする。

「どうしよう。煙い」

由希子は咳き込む。

「デパートの排煙システムが追いつかなくなつてきていいんだ」

青年も咳き込みながら一呼吸すると立ち上がった。

「ねえ、どうするの？」

由希子も立ち上がる。

「別のドアから行く」

「さつき鍵がかかっていたじゃなー」

由希子は青年について行きながら言ひ。

「これで鍵を壊す」

青年は由希子に手斧を見せる。

「無理よ。壊す時の音があの人達に聞こえたら」

「距離をとればなんとかなる。例えあいつらに聞こえても、壊してすぐ走つて行けばエスカレーターへ行ける。要は追いつかれなければいいんだ」

「無理だつて。ドアだつて壊してすぐに開くか分からないし」

「無理がどうか、やつてみないと分からぬいんだ」

青年は手斧を振り上げた。

「ダメだつて」

由希子は言つが、

「オレは何としてもここから脱出したいんだ」

手斧は振り下ろされた。

「やめて。ここにいる事がバレちゃう」

由希子が言つてゐるうちに、青年が振り下ろした手斧の刃は激しい音を立ててドアノブに食い込み、ドアノブは落ちて床に転がった。壊した時の音は、きっとあの三人に聞こえただろう。由希子は、感じている恐怖を言葉にして青年に向ける。

「音を立てずに壊す方法はなかつたの？ 今の音、絶対あの人達に聞こえたよ。私達、捕まっちゃうよ」

「うるさいな。少し黙れよ」

青年は、穴が開いたドアの中の構造をいじり、ドアを開け、中の売り場を覗き込みながら言つた。

「大丈夫。行ける。走るぞ」

「無茶よ」

そう言つて由希子も、青年のあとに続いてドアを潜り、一緒に売り場の通路を走る。考えるより先に、口の動きよりも早く、足は無意識に動く。視界の端に三人の男が映れば、足は更に速く動きエスカレーターを目指した。

青年もエスカレーターを目指して走る。手斧を持って走る分、青年の手足の動きが鈍い。その横に由希子が並び、由希子は青年を抜かして走つて行く。

「早く走らないと、あの人達に追いつかれちゃうよ」
「走りながら、よくしゃべれるな」

青年は手斧が邪魔で全速力で走れないようだ。

三人の男は、音がしたほうを見て、由希子と青年の姿に驚く。

「鍵をぶつ壊したのか」

出し抜かれたとばかりに、焦りを顔に浮き上がらせて、由希子と青年を急いで追いかけた。

「女を逃がすな」

「もう女どうこうの問題じやねえぞ」

「二人共始末しないと厄介な事になる」

由希子にもその声は聞こえていた。心中で「殺されるのはイヤ。触られるのもイヤ」と繰り返し叫びながら走る。由希子は床を蹴り膝を高く上げセーラー服のスカートを翻し、手を大きく振つて口から何度も息を吐いた。陸上部員ではないが、体育の授業で培われたせいで、走る姿が自然と陸上選手の様になつてくる。由希子が息を乱さず速く走れるのは高校生という若さだからか。

青年も由希子に続いて走る。だが、口から出る息は荒い。

三人の男達は必死で走っていたが、由希子達に追いつけなかつた。大して走つていないので息が上がつてきている。

「防火服が重い」

手ぶらの男はヘルメットと上着を脱ぎ捨てた。

由希子の耳に、ヘルメットが床に当たつて転がる音が届く。由希子は走りながら何かと思い振り返つた。素顔を晒し黒いシャツ姿で走る男が眼に入る。男の歳は三十前後。顔の作りは意外と悪くない。普通に暮らせば人並みに幸せでいられるだろうに、なぜ火事場泥棒をするのか、由希子には理解ができなかつた。そうして後ろの男に気を取られた瞬間、由希子の振り下ろした腕がパイプハンガーに当たつた。パイプハンガーは由希子の腕の動きに合わせて、かかつている服をぶら下げたまま後ろに倒れる。

「あ、そっちに倒れないで！」

由希子は振り返つて足を止めて踏ん張り、手を伸ばしたが、パイプハンガーを掴む事ができなかつた。パイプハンガーは不運にも、由希子のあとに続いて走つていた青年に倒れ込む。

「うわっ」

青年はとつさに飛び上がり足を止めて踏ん張り、手を伸ばしたが、パイプハンガーが倒れ込んだため、パイプハンガーに足を取られて転倒した。

由希子は青年に駆け寄る。

「「めん」

「いいから、あんたは先に逃げろ」

「でも……」

「オレは大丈夫だから。あいつらが来る。早く走れ」

青年は立ち上がる。

「う、うん」

由希子は心配そうに青年を見ていたが、青年に促されてまた走り出した。途中振り返つて見ると青年も走り由希子について来ていた。右からは三人の男が走つて来ている。

青年はエスカレーターに集中しない由希子に叫ぶ。

「もう後ろを見るな。走れ」

由希子は青年と視線を絡ませてから無我夢中で走った。エスカレーターはすぐそこ。たどり着けば、あとは一階まで下りて外に出るだけ。外に出れば本物の消防隊員がいて火事場泥棒の魔の手から救つてくれる。由希子は手を伸ばした。エスカレーターのベルトを掴む。振り返つて青年の無事を確かめた。

「いる？」

「ちゃんといろ。下りろ」

「うん」

青年の声に頷きながらエスカレーターの階段を見下ろしながら下りた。エスカレーターは、火事で安全装置が働いて止まっている。動いているエスカレーターを下りている時は分からなかつたが、止まっているエスカレーターはとても下りにくく、段差が高く感じられて、それを見下ろしながら一段ずつ下りるのは怖い。由希子の逃げるスピードは急に遅くなつた。

「エスカレーターつて下りにくい
「内股^{うちまた}で下りるからだ」

青年がすぐ後ろから叫ぶ。

「なんだから仕方ないでしょ」

由希子と青年が一つ目のエスカレーターを下り切つた時に、あの

三人がエスカレーターのベルトに手をついた。サバイバルナイフを持つた男が舌舐めずりをして言う。

「やっぱり女つていいな」

隣にいた手振らの男が聞く。

「なんでだ？」

「ケツを振りながらゆっくり下りて行く」

女子高生の未成熟な色気が堪ない、といった感じで、サバイバルナイフの男が恍惚とした表情をしている。

ハンマーを持つた男が言つた。

「こんな事なら早くエスカレーターに行かせてやればよかつたな」

三人は、不気味な笑い声を出してエスカレーターを下り始めた。

青年は由希子を見て苛々^{いらいら}していた。

「なんで、あんたはそんなに遅いんだ？」

「遅い、遅いって言わないでよ。余計下りにくいやない」

「オレのせいにするな」

言い合いをして下りているうちに一人は九階まで下りて来た。エスカレーター降り場の床にある9Fの文字を見て由希子は息を切らしながら言つ。

「まだ九階なの」

青年は、追つて来る三人のエスカレーターの下りる音を耳にしながら言つ。

「止まるな。奴らはあんたを狙つ^{ねら}っているんだぞ」

「だつて」

振り返った由希子は硬直した。青年のすぐ後ろに、あの二人がいたからだ。恐怖で由希子の唇が震える。青年も由希子の異変に気付いて後ろを振り返った。少し見上げた所に三人がいる。一人が足早に段差を下りて来て、持っていたハンマーを振り上げた。上から降ってきたハンマーを青年は手斧の柄^えで受け止める。

「くつ」

硬直して動かない由希子に言つ。

「逃げる」

由希子は気がついたように頷いて、不器用にエスカレーターを下りだした。

ハンマー男は、青年が持つている斧の柄^えを握つた。

「こうすれば斧は動かせないよな」

階段の上の段だという立場を利用して体重を青年にかけて押す。青年もすかさずハンマーを掴むが、上から体重をかけられては、階段下の青年の方が不利になつてくる。青年は顔を歪めて二、三段下

りてから踏み止まつた。そこに手ぶらの男が来て同じく手斧の柄を握つた。

「よくも俺の斧を。返せ！」

青年が手斧から手を離さないため、男は青年の顔を殴つた。

「斧をよこせ」

それでも青年は手斧を手放さない。

もう一度男が殴ろうとした時、男の顔に何かが当たつた。男がエスカレーターの階段に転がつた物を見ると、かわいい恐竜のぬいぐるみだつた。

「やめなさいよ。おじさん達、一人相手に卑怯よ」

由希子は、床にある9Fの文字の上で仁王立ちになつて怒つている。手当たり次第に集めた商品を抱えて男たちに投げつける。当然それもぬいぐるみだつたりする。なので、顔に当たつても全然痛くない。鬱陶しくて邪魔なだけ。手ぶらの男は顔にぬいぐるみを受けながら言つた。

「あの女はアホか」

サバイバルナイフを持つた男が、青年を押し退けて階段を下りる。目的は由希子。

「そのアホさ加減が堪らなくかわいいんだ」

「いやー、来ないで」

由希子は手にあつたぬいぐるみをどんどん投げつけた。腕の中のぬいぐるみはすぐになくなつてしまつ。ぬいぐるみ置き場も空になつていて。エスカレーターを下りて逃げたいが、エスカレーターからはサバイバルナイフを持つた男が追つて来る。由希子は、見回して最初に目についた店内の通路を走り出した。

「誰か助けて。お願ひだから、誰か返事をして」

由希子は、店内に残つてゐる人がいるかも知れないと思い声を上げるが、自分の声がむなしく響き渡るだけ。

「お嬢ちゃん、そつちは行き止まり。逃げても無駄だよ」

サバイバルナイフの男は、由希子を優しく呼びかけながら追いか

ける。

ハンマーの男は、階段の上から由希子を見下ろして叫んだ。

「女、止まれ。この男が死んでもいいのか？」

呼ばれて由希子が振り返ると、青年はハンマー男に捕まっていた。青年の左頬は腫れて青アザになっている。青年が持っていた手斧は男の手に渡っていた。

手斧を取り戻した男は上機嫌で斧の刃を青年にあてがつた。

「言う事を聞かなければ、この男の命はないぞ！」

由希子は足を止めて棒立ちになつた。

青年は一人の男によってエスカレーターから引き摺られるようにして下ろされる。ハンマー男は青年を9Fの文字がある床にうつ伏せにして押さえ付けた。

青年はそれでも声を絞り出して言ひ。

「オレに構わぬ逃げる」

「でも、でも、どうやつて？」

唯一の逃げ道であるエスカレーターには男達がいて、青年は人質になつている。次の逃げ道として選んだ店内の通路も行き止まりで、いくら由希子が逃げたいと思つても、どうする事もできず、どう逃げていいのかも分からぬ。

手斧の男は青年を容赦なく踏みつける。

「うるさい、黙つてろ」

青年は苦しんで呻く。

サバイバルナイフの男は、青年に気を取られている由希子の死角からゆづくりと近づいて由希子の腕を掴んだ。

「かわいいねえ。肌も滑らかでスベスベだ」

サバイバルナイフの男の、気味の悪い笑顔が由希子に近づく。

「触らないで」

悲鳴をあげ騒いで腕を引く由希子に、ナイフを突きつける。由希子の動きが止まり怯えた表情を見てニヤつくと、セーラー服のリボンにナイフの刃を当てる。リボンを切り、ナイフの先端にリボンを

絡めてセーラー服から抜くと、由希子の目の前でナイフを振りリボンを床に落とした。その後ナイフも手放す。サバイバルナイフが床に落ちて転がる甲高い金属音が響いたと同時に、由希子は男に押し倒された。

由希子は倒された衝撃を背中に受け、痛みとショックで声が出なくななる。

覆い被さつて来る男は、抵抗する由希子の手を床に押さえつける。そして、由希子の首筋に吸い付き、滑り気のある舌で舐めあげた。生温かい身の毛も竦立つ感触が由希子の全身を貫いた時、由希子は今までに出した事のない力を出して、掴まれていた手を振り解いた。背中の痛みも忘れ全身に力が入る。

「いやあー

由希子は絶叫した。

青年は体を振るつて叫ぶ。

「やめる」

「黙れ。命が欲しかつたら静かにしろ」

男が手斧の刃を青年につきつける。

青年はハンマー男に押さえつけられながら叫びをやめなかつた。どこか一点を見つめ姿無き存在に呼びかける。

「まだなのか」

それに女性の声が返事をした。

「現在の鬼変率八〇%。刑の執行にあと一〇%足りません」

非常事態だというのに女性の声は冷静でどこか冷たい。

ハンマー男は青年を床に押さえ付けながら言へ。

「誰と話しているんだ」

手斧の男は女性の声の居所を探す。

「今のはどこから」

青年は体に入れる。

「足りないつて、このままじゃあの娘がやられてしまう」

「双方の行動内容に關する必要はありません。任務遂行を最優先にして下さい」

「お前らはいつもそうだ」

青年は拳を握り締めた。

男はハンマーを捨てて両手で青年を押さえる。

「こいつ何を言つてるんだ。氣でも狂つたか」

手斧の男は興奮するハンマー男を宥める。

「落ち着けつて。きっと、どこかにもう一人いるんだ。あの娘と同じ女がよ。まだ隠れているんだろ。こいつの命が欲しかつたら出て来い」

その手斧の男の目蓋は、膨らみ始めていた。

由希子は必死になつて抵抗していた。手で男の顔を押し返してい
る。

「来ないで」

サバイバルナイフの男は由希子に伸の^のしかかり、ニヤついた顔の半
分は由希子の手に押されて歪^{ゆが}んでいる。その男の瞳が^{こがね}黄金色に変わ
つた。

「なんなの。いや、いやーー」

由希子は男を押し返しながら悲鳴を上げる。

青年は、ハンマー男によつて床に押さえ付けられているといつ
に、腕に力を入れて体を起^おこした。男の手を掴み振り解^ほく。

「放せ。その娘^{むすめ}もだ」

男は慄いて急いで床にあるハンマーを拾^あう。

「なんだ!? こいつの力、普通じやねえ」

青年の前に手斧の男が立ち塞^{ふさ}がる。

「大人しくしろ。殺すぞ」

青年の後ろにはハンマー男もいる。

「鬼変率九〇%」

青年は振り^{ふり}躊躇^{かが}された手斧を受け止める。

「悪鬼になろうとしているお前らに、もう手加減する必要はないよ
な」

そして押し返した。手斧男は後ろに転倒して、背中を滑らせ床を
三メートルほど移動する。

女性の声がまた響く。

「行動を慎みなさい。まだ悪鬼になると決まつた訳ではありません

「どう見ても悪鬼だぞ」

「過去のデータを見ると、少数ですが、改心する者がおります」

「この状態で? 嘘^{うそ}だろ」

今度は青年の前にハンマー男が立ち塞^{ふさ}がる。

手斧男は体を起こしながら言つた。

「氣をつける。あいつ凄い力だぞ」

男はハンマーを持つて構える。

「ああ、分かつてゐる。お前、何者だ？」

問われても青年は答えず、ハンマー男の後ろ、サバイバルナイフの男の下で必死に抵抗している由希子を見ている。青年がハンマー男を避けて行こうとするので、ハンマー男はムキになつて青年に手を出した。

「この野郎、ぶつ殺す」

青年は、ハンマーを振り回す男を軽々と交わす。

「鬼変率九五%」

ハンマー男はヘルメットを投げ捨て防火服を脱いだ。

青年は、お楽しみ中のサバイバルナイフの男に近づいて、男の両脇に手を入れ引っ張り由希子から引き離した。

「やめる」

青年は男を横へ投げる。サバイバルナイフの男も床を転がり滑つていく。

由希子は抵抗していた事が幸いして首が赤くなっているだけで無事だった。

「もうダメかと思った」

立ち上がりつてすぐ青年の腕ににすがりつく。涙を流しながら、青年の胸元で動く緑白色の翡翠の曲玉を見た。革紐でなくチエーンでもなく、ねじれて紙縫りのようになつてている布の紐が珍しい。

「あんたが素直に逃げていれば、こんな事にならなかつたんだ」

「何よ。私はあなたを助けようと思って」

安心したのも束の間、由希子は男達の異変に気がつき指をさした。

「あ、おじさん達が変」

三人の男は顔が腫れ上がり口から牙が伸びている。

「鬼変率九七%」

「はあ、まだなのか。勘弁してくれよ」

青年は溜め息をつく。

由希子は辺りを見回す。

「今の声は？ どういう事？」

由希子は青年に聞く。

「どういう事つて、あなたがあっち側じゃなければ、こっち側つて事だろ」

「あっちこっちつて、何よ」

男達の頭に角が生える。

「鬼変率九八%」

青年は由希子を見た。

「あんた、本当に何も知らないのか？」

「知らないわよ。一体これはどういう事なの？」

由希子はセーラー服の汚れを掃うのを忘れて、青年の横で騒ぐ。男達の指先から爪が伸びる。足も防火靴を突き破つて爪が飛び出している。

「鬼変率九九%」

青年は、事の始まりを予想して呼吸を整えながら言った。

「あれは鬼だ。あいつらは鬼になる事を望んだんだ」

「鬼！？ え！？ なんで鬼が？」

由希子は訳が分からぬ。

男達の体が膨らむ。防火服が破れ筋肉が剥き出しになつていく。

「鬼変率一〇〇%。鬼三体のデータを確認。絶鬼の剣を創出します」

青年は由希子の背を押した。

「離れてろ」

「離れてろつて？」

「早く離れろ！ 僕が動けねえだろ」

聞きたい事がいっぱいあるが、普通でない雰囲気を感じて由希子は青年から離れた。

青年は手をあげた。手の平に光が集まる。

「ここだ、絶鬼の剣。オレはここにいる」

男達は音を立てて体を軋ませながら、青年が言う鬼へと変貌し近づいて来る。恐怖を感じ再び青年にすがりうとした由希子だが、

青年の手から発せられる光の眩しさに足を止めて手で庇を作り眼を
かばう。それでも眩しくて眼を閉じた。

目蓋まぶたを通り抜けてくる光を感じ、それが普通の光でないのを知る。

「何、この光り。眼に沁しづみる」

そして由希子の目の前で信じられない事が起こった。

青年は天井に向けて広げた手に剣を現したのだ。刀のよつな細身の剣は刃やわらが水色に輝いている。

光が柔らか味を帯びた頃、由希子は眼を開けた。

「刀？ 剣？ 刀が半透明でガラス細工みたい」

剣の柄えは骨董屋に売っている日本刀と同じだが、水色の諸刃もろはで真つ直ぐに伸びているのを見ると、どうやら日本刀ではないようだ。

青年は剣を静かに構えた。刃先を三体の鬼に向ける。

鬼達はたじろいだ。手斧を取り戻した鬼が口を開く。

「お前も鬼なのか？」

ハンマーを持つた鬼も言つ。

「我らと同じ鬼なら争う必要はない。共に女を分ち合わかれあおうじやないか」

由希子はそれを聞いて青年から遠ざかつた。

「我らと同じつて、あの人も鬼なの！？」

どう見ても、青年の姿は人間にしか見えない。

「断る！」

青年は摺り足で移動しながら鬼達と間合いを取つてはいる。サバイバルナイフを持った鬼が先頭に立つ。

「女を独り占めにする気か。よこせ」

「それも断る！」

青年とサバイバルナイフの鬼が睨み合いになつた。

「あの人も鬼だなんて、そんな……」

由希子は訳が分からず、目の前で起こつてはいる事が信じられず、近くにあつた商品ケースに半ばもたれかかる恰好で立ち竦んだ。

「何をしてる。早く逃げろ」

青年は由希子を逃がす気でいるようだ。

由希子は目の前で起こっている事が信じられず疑心暗鬼になつていたが、自分を逃がそうとしてくれる青年の良心を信じる事にした。

「うん、分かつた」

逃げ道はただ一つ。火の気が無いエスカレーターだけ。だが、相手の鬼もそれに気付いていて、由希子の行く手を阻むようにエスカレーターの前に立つ。

ハンマーの鬼の腕は筋肉が音を立てて更に膨らむ。

「逃がすか」

手斧の鬼も由希子の前に立つ。

「女は俺らで捕まえる。奴はお前に任せたぞ」

サバイバルナイフの鬼は気持ち悪い笑みを浮かべて返事をした。

「ああ、覚醒前の奴など怖くない。お前も捕まえて俺の玩具にしてやる」

青年は静かに剣を構えてサバイバルナイフの鬼の動きを見ている。由希子はこれから走らなければならないのに、三体の鬼を目の当たりにして恐怖で息が切れてくる。

「どうやって逃げれば……」

由希子が今思いつく安全な場所は青年の傍ら。無意識に青年に近づく。

鬼と青年が睨み合う冷たく恐ろしい静寂の中、由希子の後方で天井が軋む音がした。

鬼達は不気味な声で笑う。

「楽しくなってきた」

「この震えのくる雰囲気が心地良くて堪らない」

「なあ、坊や。俺らと同じ眷属のお前も楽しいだろ」

鬼達にも天井が軋む音が聞こえているようだ。

「黙れ、お前らと一緒にするな」

そう言い返す青年の腕の服が弾け飛んだ。

「 もや 」

由希子は驚いて小さな悲鳴を上げる。見れば青年の腕の筋肉が不気味に膨らんでいる。彼も鬼達が言う通り鬼なのだ。由希子の心中に新たな恐怖が生まれる。このまま青年を信じていいのかと。迷いが生じ後退りをする由希子の後ろで天井が崩れ落ちた。

「 もやー 」

由希子の悲鳴は大きくなり何回も悲鳴をあげる。

崩れた天井から煙が流れ込んできた。まだ炎は見えないが、きっと上部は燃えているに違いない。

由希子は喉が焼ける感じがして咳き込む。せきこ呼吸困難で体を曲げて

座り込む由希子に、斧を持つた鬼は信じられない事を言った。

「 お譲ちゃんも鬼になれ。そうすれば多少楽になる。鬼の体ならこの煙の中についても苦しくないぞ 」

「 私が鬼に！？ 」

由希子は咳き込んで苦しい表情をしながら手斧の鬼を見る。もう何もかもが分からない。

「 お譲ちゃん、生き残りたいんだろ？ 」

「 だからって、鬼はイヤ 」

混乱している由希子だが、これだけは分かる。

「 鬼は人じやないもの 」

ハンマーの鬼は由希子に近づく。

「 そんな事を言つた女はお前が初めてだ。俺もお前が欲しくなつたぞ 」

「 いや、来ないで 」

由希子の声は煙のせいでしゃがれ始めている。

「 させるか 」

青年の左手に縄なわが現れ、縄をハンマーの鬼に向かって投げた。縄はハンマーの鬼の首に巻き付く。

「 おのれ 」

ハンマーの鬼は、由希子への行き先を変更して青年に立ち向かつ

た。

青年の剣をハンマーで弾き返し、よろめいてバランスを崩した青年がけてハンマーを振り下ろす。

青年がすれ違う間に避けた時に、ハンマーが鬼の腕をつけたまま天井に舞つた。

「あああ」

鬼は言葉にならない声を上げて左手で右肩を押さえる。右肩からは鮮血がほとばしり、鬼の前に先ほどまで繋がっていた腕が落ちた。ハンマーを掴んでいる腕は、体から離れていると言うのに痙攣を起こし、ハンマーを持ったまま、陸の上の魚のように跳ね上がっている。

鬼は自分の腕を拾おうとして一、三歩進み、次の足を踏み出したところで床に倒れた。鬼から流れ出た血が床一面に広がる。

由希子は煙と一緒に血の匂いを吸い込んだ。煙のせいでもまた咽ながら、血の匂いで吐きそうになりハンカチで口を押さえた。

サバイバルナイフの鬼は言つ。

「火事の煙で苦しいのに、なぜ人に拘る。^{こだ}鬼になれば、煙も血の匂いも甘美に思え楽になるものを」

どんなに楽になろうと鬼になつてはいけない。鬼になれと言われれば言われるほど由希子の頭の中で警鐘が鳴る。

酸欠で意識が朦朧^{もうりゆう}としながら由希子は囁くような小声で言い返した。

「鬼はイヤ」

青年はサバイバルナイフの鬼に立ち向かいながら言つ。

「たまにあんたのような人がいるんだよな。鬼になるのを拒む人が「由希子はもう呼吸するのが精一杯で何も言い返せない。ただただ煙の中で戦う青年を見守るだけ。」

青年は横に舞つて閃くサバイバルナイフを剣先で掬うように下か

ら押し上げ、円をかいてナイフの刃先を押さえ込み、ナイフを持っている鬼の腕を掴んだ。体の向きを変えて鬼と並んで立つ。「輪廻の順が後回しになるが、まだ間に合つ。人に戻つて静かに暮らすんだ」

「ふつはつは。笑わせるな。お前も鬼のくせに」

鬼は青年を押し返した。

青年は一度離れ距離をとる。

「仕方ない」

言葉のあとに青年が持つてている剣の刃が一瞬波打つて動く。

「お前は！」

鬼が言いかけた時、青年は隙すきをついてサバイバルナイフの鬼を下から上へ切り裂いた。サバイバルナイフが真ん中から切れて床に落ちる。そのあとに鬼の体も斜めに切れて上半身が床に落ち、胴体を失くした足が力を失つて膝ひざが曲がり、床に右膝をつけてから倒れた。流れ出た大量の血はが由希子の足元まで広がる。

由希子は床を這つて鬼の血から遠ざかつた。腰が抜けてしまつて這つて逃げる動きがぎこちない。

鬼は下半身が無いのに頭を持ち上げた。

「明王の童子とわじだったのか」

言い終えてから鬼は頭を床に落とした。鈍い音が由希子の耳に届く。

残るは手斧の鬼、ただ一体。元はハンサムな顔立ちだが鬼面になつてから前の面影は無い。

「明王の童子の中に鎧よろいに身を包み戦う姿をした指徳童子しつべきわどがいると聞く」

「オレはそんな高尚なもんじゃない」

青年の背中せなかが膨らむ。衣類が剥むけ剥むき出しになつた背中の筋肉がみなみと動く。

手斧の鬼も更に筋肉が盛り上がり首も太くなつていく。

「なら、お前は何者だ？」

「見ての通り、オレはお前と同じ鬼だ。心まで鬼になつてはいないが」

鬼は手斧を振り上げた。

「それだけの違いで、お前は俺の邪魔をするのか」

「それだけ？ 「冗談じゃない。大きな違いだ」

青年は剣を振つて鬼の手斧を弾き飛ばした。次に剣を突き出す。しかし、刃は鬼の腹の前で止まつた。鬼は笑う。

「くつくつく。鬼の力を使い皮膚を硬くした。俺を貫けるものか」「くそつ、硬過ぎる」

青年は間合いを取つてから両腕を振り上げた。日本人特有の黒い瞳は黄金色に変わる。青年の顔が膨れ上がり頭に角が生える。それと同時に天井に向かつて吼えた。

「うおおお

低い声が何種類も合わさつたような、低音の雄叫びがすべての物を震わせる。

由希子も頬に空気の振動を感じる。近くにあつた商品ケースのガラスが割れ、外と隔てている窓ガラスまでもが割れる。

もうそこに青年の姿は無かつた。服が破れ剥き出しになつた青黒い上半身。口には牙が生え手斧の鬼と変わらぬ姿になつてゐる。向かい合つて立つてゐる鬼は床にある手斧を拾う事なくにんまりと笑顔を作つた。

「俺の体が剣で貫けないと知り、自ら鬼と化したか」

青年だつた鬼は舌舐めずりをして、爪が伸びた手で涎をぬぐつた。

「力が漲る」

鬼同士は組み合つた。

由希子は煙で息が苦しくて床に手をつきながらも、まだ青年の面影が残つてゐる青黒い鬼に言つ。

「なんで鬼なのよ。どうして人じゃないの？」

青黒い鬼が答えないため、体に防火服が残つてゐる鬼が言つた。

「お前の恋人が、お前の姿を見て泣き叫んでいるぞ」

「オレの恋人じゃねえ」

鬼同士の力と力のぶつかり合いは必要以上に続いている。

由希子は逃げるのを忘れて泣きながら鬼同士の戦いを見ていた。幼い頃に聞いた昔話に出てくる鬼。鬼の話は大概不幸な結末が待つてゐる。今戦つてゐる青年も勝とうが負けようが不幸な結末が待つてゐるような気がしてならなかつた。忍び寄る新たな不安を感じながら、由希子は鬼同士の戦いを魅入つてしまつ自分の変化に気付かずについた。

火事の煙は周囲を漂い鬼の姿を霞ませる。鬼同士は激しい取つ組み合いの末、相手の首を掴んだ鬼が、手に力を入れて首を絞めた。鬼は楽しそうに、敵対する鬼の首を絞めたまま揺さ振り弄ぶ。暫くして、ゴキッと骨が折れる音がして、折れ曲がつた首から血飛沫が飛び散つた。勝つた鬼が息の絶えた鬼をぬいぐるみのように片手で投げ捨てる。床に転がつた鬼に見向きもせず、勝ち誇つた鬼は体の向きを変えて由希子に近づいた。

由希子は鬼を凝視する。どちらが勝つたのだろうか。煙で鬼の姿が霞んで見にくい。青年だつた鬼が勝てば良いが、手斧の鬼が勝つていたら今逃げなければ手遅れになる。由希子は立ち上がるべく床にある手に力を入れた。立とうとするが、近づいて来る鬼から逃げるべきか待つべきか、心の迷いのせいで動けない。鬼がゆっくりと近づいてくることに、鬼を包んでいる煙が薄くなる。見えてきた鬼は返り血で体が赤い。青年じゃないかもしれない。と思つた時、鬼

の胸元で揺れる緑白色の光に気付く。独特のカーブがある翡翠の曲玉を見て、由希子は勝ったのが青年だと知った。

「鬼なの？ 人じゃないの？」

「ああ、人じゃない」

由希子は泣きじやくる。

「なんで先に言つてくれなかつたの？ 鬼だつて知つていたら、あんたなんか置いて、私一人で逃げたのに」

鬼は床に座り込んでいる由希子に手を伸ばした。

由希子は返り血で真つ赤になつた鬼を見て、涙を流しながら怯えた表情をする。

鬼は一瞬ためらつて手を引くが、無表情になり由希子の腕を掴んだ。

由希子の腕に血がつき、由希子は悲鳴をあげる。

「血がつくな。私に触らないで」

「それより立て。逃げないと焼け死ぬぞ」

咳き込んでいる由希子を見て、青黒い鬼は気づく。

「もしかしてあんた、煙を吸い過ぎて酸欠で立てないのか？」

由希子の後ろでまた天井が崩れ落ちた。今度は炎が燃え上がる。

由希子はまた悲鳴をあげる。

「いかん。悪いが」

鬼は由希子の腰に手を回して片手で持ち上げた。由希子を持ち直し片腕に乗せて抱いて走り出す。

鬼に掴まるしかない由希子に粘り氣のある血がつく。

「いや、おろして」

由希子は鬼の体を叩いて抵抗するが、すぐに酸欠になり意識が朦朧として体に力が入らなくなる。剣の刃を通さない硬い鬼の体を、自分の小さな拳で叩いてもどうにもならないと諦めが生じ、もう由希子には血でべトつく鬼の体にしがみ付くしか方法がなかつた。

青黒い鬼は由希子を抱いたままエスカレーターを下りる。由希子は鬼の肩から顔を出して、煙の中で水色に輝く剣を見えなくなるまで見つめた。

鬼は息を乱すことなく軽快にエスカレーターを駆け下りる。

このまま一階まで下りて外に出れば消防車と救急車が来ているはず。救急隊員に助けを求めれば、きっと助けてくれるだろう。でも、鬼になった青年はどうなる？　由希子の脳裏に疑問が浮かび、脳は青黒い鬼を助けたがっている。不幸な結末が待っている昔話に出てくる鬼。でも、幸せになつた鬼もいたと由希子は思い出した。

「外に出たらダメ」

「はあ？　今度は外に出るなど！？　オレを散々叩いておいて何を言つてるんだ」

「鬼の姿だし、こんなに血塗れになつていたら絶対に捕まる」

由希子はきれいな空気を吸つて、幾分樂なつた胸を大きく膨らませて続けて言う。

「捕まつて、研究所に送られて……。じゃなくつて、お祓いされるかも」

由希子に言われ、鬼は低い声で笑い出した。

「お祓い！？　あははは。あんたは、本当に何も知らないんだな」
鬼の顔で笑う青年に戦いの時の緊張感は無い。エスカレーターを降りきつて床の1Fの文字を踏む。

「知らないんだな。つて笑つてる場合じゃあ」

由希子は、言つた直後に鬼に運ばれて外に出た。

外はやはり消防車と救急車が何台も並び、消防隊が火事になつているデパートの消火活動をしている。

「大丈夫ですか？」

救急隊が鬼の下もとに駆けつける。

「彼女、煙を吸つて自分で立てなくなつてゐるから」

「分かりました。おい、ストレッチャーを」

救急隊は鬼と普通に会話をしている。由希子は、もうこの奇妙な

光景に慣れてしまい驚きはしないが、やっぱりなぜか知りたい。

鬼は由希子をストレッチャーに寝かせた。

「じゃあな」

「あの、名前」

呼吸が楽になつたはずなのに肝心な時に声がかすれで出ない。救急隊は由希子を運び酸素マスクを由希子の口に宛がうが、由希子は酸素マスクを押し返す。由希子は救急隊に運ばれながら喉に力を入れた。

「私、由希子」

鬼は遠ざかる由希子を見る。しかし、鬼が何も言わないので、由希子はもう一度言った。

「私の名前は由希子。あなたの名前は？」

「オレは」

そのあとの声は、不運にも野次馬の悲鳴で搔き消された。何が起きたのか分からぬ由希子は辺りを見回す。野次馬はデパートの上を指さしていた。悲鳴は次々に起こり、まだ収まらない。由希子が何かと思い見上ると、死んだはずの鬼がデパートの壁に掴まつていた。一体も。

「さつきの九階だわ」

一体の鬼は壁から手を放して飛び降りた。

野次馬の悲鳴が大きくなる。

鬼は救急車の上に降り立つ。大きな音を立てて救急車の屋根が凹む。その鬼は右腕が無かつた。

もう一体の鬼は由希子の近くに降り立つ。首が逆Vの字に曲がり、鬼が足を動かすたびに頭が肩で揺れてい。斜めになつた顔の瞳が瞬いて、牙が出ている口から低い声が出る。

「由希子っていうのか。かわいい名前だ」

首の曲がつた鬼に言われても嬉しくない。由希子の心の中にやつと消え去つた恐怖がまた湧き起つた。

「来ないで。助けて！」

由希子は救急隊に助けを求めるが、救急隊は由希子を置いて逃げ出した。

「置いていかないで。助けて」

由希子は起き上がるが目眩^{めまい}を覚えてストレッチャーに掴まる。救急車の上にいる鬼も地面に降りて由希子に近づく。

目眩で景色が揺れても、近づいてくる鬼の事は分かる。

「もうイヤ。なんなの、ここは」

由希子はストレッチャーから足を下ろした。足の重みで体がストレッチャーからずり落ちる。そのまま着地をしてストレッチャーに掴まり足に力を入れる。だが、まだ立てず由希子は這いつぶばつた。砂利^{ひき}が膝に減り込んで痛いが、そんな事に構っている余裕は無い。とにかく逃げなければ、今度こそ鬼に捕まつていいようにされてしまう。

「あの人所に」

鬼の姿をしている青年を見た。彼はこっちに向かって来ている。青年も鬼だが頼れるのは彼しかいない、と由希子は思つた。

その由希子の前に、また別の鬼の足が落ちた。足だけの鬼。先ほど青年に切られたサバイバルナイフの鬼のものだ。その足の前に、上半身が落ちる。切れた腹からは、血が抜けきつた白い内臓が見えている。上体を立て直し内臓を引き摺りながら、手だけで上体を移動させて由希子に近づいてくる。

由希子は悲鳴と同時に顔を背けた。気持ち悪さに吐き気を催す。手で口を押さえるが、その手がないと這いつぶばつて逃げる事ができない。しかも青年の下へ行きたいが、その間には内臓を見せて近づいてくる鬼がいる。思うように移動ができず、どうすればよいのかと答えを探しているうちに、由希子は逃げ遅れた。

胴体だけの鬼は由希子の左足を掴む。サバイバルナイフはもう無いが、だからといって由希子の恐怖が減る訳ではない。由希子は言葉にならない悲鳴を上げた。足を動かして鬼の手を外そうとするが、

鬼がしがみついてくる。続いて下半身が歩いて近づき、切り口から内臓を見せながら、由希子の前に立ち憚つた。

「何を怖がる？ サっき首を舐めたら感じていたじゃないか」

不気味な悪い声が、足元から聞こえる。由希子は、総毛だつたあの感触を思い出し、無我夢中で立ち上がつた。しかし、鬼が左足を引っ張り、また地面に手をつく。

「由希子、こっちだ」

青黒い手が由希子を呼んでいる。人間ではない手を、由希子は迷わず掴んだ。鬼の青黒い肌は戦いの返り血でべトついている。由希子はもう離れまいと青黒い鬼に抱きついた。

青黒い鬼は青年。青年は由希子の足を掴んでいる鬼を踏みつけた。由希子の足から鬼の手が外れる。由希子と青黒い鬼が眼を合わせた時、青黒い鬼は後ろから強い衝撃を受けた。よろけて片膝をつく。後ろからは首が曲がつた鬼と右腕を失つた鬼が来ていた。

由希子は悲鳴をあげる。

青黒い鬼は由希子を手放した。

「離れる」

そして手を空に掲げる。

「絶鬼の剣よ」

青黒い鬼の手に、あの剣が現れた。

水色に光る剣を鬼達は嫌そうに見る。

「また、その剣か」

腕の無い鬼と首が曲がつた鬼は手を繋いだ。融合して一体の鬼となる。融合した鬼は青黒い鬼を回りこむように歩き胴体だけの鬼と手を繋いだ。下半身は自ら歩み寄り融合する。

三体の鬼は融合により、体が倍に膨れ上がり背も伸びて、一体の真紅の鬼となつた。

真紅の鬼は手を開いたり閉じたりして、新しい体の感触を味わい喜ぶ。

「やつと手に入れたぞ。お前と同じ、強大な鬼の力を」

真紅の鬼は、体の奥から込み上げてくる鬼の力を感じて、喜びの雄叫びをあげた。青黒い鬼に対して悠然と構え、手を空に掲げる。

そこに、ピンクに光る剣が現れた。

「糞明王にも、馬鹿童子にも、媚びる事なく、この剣を手に入れたぞ」

まだどこからか、女性の声がする。

「三体の鬼の融合を確認。過去の出現データ有り。炎鬼。邪鬼レベル。装備、火邪の剣です」

喜ぶ真紅の鬼を見て、由希子は余計に分からなくなる。

「どういう事。じゃあ、あの人も何体か集まつた鬼ってこと！？」

あの人と言われた青年は、今は青黒い鬼になつている。黄金色の瞳で真紅の鬼を見た。

「融合か。厄介だな」

真紅の鬼は、青黒い鬼より背が高く、体格も大きい。それに呼応してか、絶鬼の剣の水色の刃が伸びて太くなる。

「よりによつて邪鬼レベルの炎鬼になるとは。ただの鬼でいれば、人に戻れたものを」

「ふん、弱い人間になど戻りたくないわ。手に入れたこの力で、お前を倒し融合して最強の鬼となり、至高の存在になつてやる」

真紅の鬼は、青黒い鬼に火邪の剣を振り翳した。青黒い鬼は絶鬼の剣で受け止める。

「至高の存在つてなんなの！？」

由希子は両方の鬼の戦いを見守る事しかできない。

火事を見に来ていた野次馬は、逃げる事なく鬼の戦いを見ている。

「こんどはどっちが勝つかしら」「赤じゃないか」

「俺は、あっちの青いほうだと思つ」

消防隊は鬼を避けるようにして消火活動を続いている。

由希子は、鬼の闘いを普通に受け入れている人々が異質なものに感じてならない。

「やっぱり、ここは変よ」

その反面、鬼の姿で闘う青年を受け入れたがつていてる田分もいる。「お願い負けないで」

由希子は青年の剣が炎鬼に弾き返されるたびに応援した。

そこへ、鬼が離れた頃合を見計らつて、救急隊が由希子の所に戻ってきた。

「救急車が壊れてしまつたので、とりあえずここで応急処置をします」

救急隊員は由希子の応急処置をしていく。もう一人の救急隊員が記録機を持って由希子に近づいた。

「あなたの名前は？」

「広田由希子です」

そして血液型・年齢・住所の質問を受けて由希子は答えていく。

「血液型はA型。年は十七。住所は東京都足立区」

「東京じゃなくて、今の君の住所だよ」

「だから、東京都足立区が今の住所なんですが」

「それは本当なんですか？」

記録をしている隊員の手が止まり、応急処置をしている隊員の手も止まる。救急隊員はお互いの顔を見合せた。

青黒い鬼と炎鬼は激しい死闘を繰り広げていた。双方の剣が交わるたびに、水色とピンクの火花が散っている。

炎鬼は剣を振り回すたびに嬉々とした声を上げて青年である青黒い鬼に向かつて行く。

「お前は雷鬼だな。炎鬼の力を手に入れてやつと分かつたぞ」

炎鬼は、雷鬼と剣を重ね合わせる。

「雷鬼よ、なぜあの女を守るうとする？ あの女を欲しがる理由はなんだ？」

「いらんと言つてるだろ」

「なら、お前の欲しいものは何だ？」

炎鬼は雷鬼を押し返す。

雷鬼は押し返されても踏み止まり、すぐに剣を突き出す。

「お前に答える必要は無い」

「力か？」

「つるさい」

雷鬼の反応を見て、炎鬼はニヤリとした。

「力か。そんなに力が欲しいのか」

「黙れ、その減らず口を封じてくれる」

雷鬼の剣がまた太くなる。雷鬼と炎鬼の剣が交わった時、雷鬼の絶鬼の剣の刃が、炎鬼の火邪の剣の刃に減り込んだ。

「こうなればお前のように、俺達も力を増幅して」

そう炎鬼は言うが、何も起こらない。

「どういう事だ」

炎鬼は驚愕する。

「まさか！ お前は鬼の気を吸収できるのか？」

「今頃気付くとは、炎鬼の能力を扱いきれんようだな」

雷鬼は唸り声と共に剣を横に動かして、火邪の剣の刃を切断し、

次に炎鬼の首を刎ねた。眼を見開いた炎鬼の首が宙を舞い地面に落ちる。体は動きを止めて首の切り口から鮮血が吹き出す。吹き出す鮮血の勢いがなくなると体は地面にうつ伏せに倒れた。

また、女性の声が由希子の耳に届く。

「炎鬼、消滅です。人型三体の御靈の分解を確認。再構成のため、下層界へ強制転送します」

炎鬼の死体は、光の零となつて花火のように飛び散り、空や地面の中へ消えていった。

「はあ」

雷鬼は大きく息を吐くと、青年の姿に戻った。破れた服は元に戻らず、ボロボロの状態で青年の体に辛うじてくつついている。

野次馬は口々に雷鬼の勝利を囁きながら青年を見ている。

青年は救急隊員に囲まれている由希子の所へ行つた。

「由希子、大丈夫か？」

見ると、由希子は号泣していた。

「ここが地獄だなんて、私が死んでるなんて信じられない。しかも住人は全て鬼だなんて」

救急隊員は困った表情をして由希子を宥めている。

「まあまあ落ち着いて。ここは地獄といつても、世のため人のためにと心を鬼にして行いをしているうちに、相手の利益にならない行いをしてしまつたり、過度にしがみついて犯罪者になつてしまつたりと、罪の軽い者が来る所で、みなさん元は人だつたんですから」

「地獄も区画整理が行われ近代化が進み、生前と変わらぬ生活ができますし、特にここは地獄といつても上層の浅い方なので、鬼でも人でも好きな姿で暮らすことが許されているんですよ。ただ、早く人に転生したいと願う者が多いので、人の姿で生活している者が多いですが」

「死んだのはショックだったかもしれません、ここで心静かに暮らして、現世で犯した罪を償えば輪廻の順番が回ってきて、また人として生まれる事ができるんだし、そんなに泣かなくても」

「ママもパパも友達もない。これから一人でどうじらつていうの？」

「よく普通に暮らしてきた高校生の由希子にとって、死という現実は、家族や友人、家を失う事になり、地獄での今後の生活を考えなければならないが、先立つ物も無く、それでも、それらを全て一気に受け入れなければならず、由希子はパニックになりながら震える手で涙を拭い、何かよい方法がないかと必死に考えた。

青年は泣きじゃくつて、由希子を見下ろした。

「たまに、あんたのようない人がいるんだよな。いきなり地獄に来てしまう人が」

由希子は、唯一の感情の捌け口である青年に訴える。叶わぬ事だと判つても。

「イヤだ、まだ死にたくない」

青年は由希子の横にしゃがんだ。

「普通、死を受け入れられない者は、向こうの世界に残るんだけどな。ここに来てしまったもんは仕様が無い。大丈夫、ちゃんと届出を出せばこの学校に通えるし、部屋も用意してもらえるから」

由希子は泣き腫らした眼で青年を見上る。なんとかなる事を教えられて少し落ち着くが、まだ納得がいかない。諦めの悪い由希子が、考え方抜いて出した結論は、とても悲しく残酷で、切なく優美で、狂喜に満ちたものだった。

「ねえ、あなたなら分かるんじゃない。パパとママの所に戻る方法が」

由希子は青年の言葉を遮りつつ、

「ここで暮らすんじゃないで、すぐに戻る方法よ」

強い口調で言ってから、由希子は青年の腕に手をかけて、口説き文句のよろこびに声に色艶を含ませて言った。

「私、救急隊の人から聞いたわ。あなたは、神の僕として鬼の力を与えられた、地獄の番人の一人だって。本当は、すぐに戻れる方法を知っているんでしょう?」

「いや、だから……」

青年が言葉を詰まらせていると、救急隊員が言った。

「昔、鬼の力で現世に戻った者がいると聞いた事はあるが、本当かどうかは」

「鬼の力……」

由希子の顔つきが変わる。子供の頃に聞いた鬼が出てくる昔話。それが現世に戻った鬼の事だらうか。

青年は由希子の心情を察して言う。

「現世に戻るために、鬼になつてはいけない」

「さつき、あの人達に鬼になれつて言われたわ」

火事場泥棒をしていた偽消防士がその後どうなったのか、由希子はもう忘れてしまっている。

「今の心の状態で鬼になつたら、悪鬼になつてしまふ。悪鬼になつたら、罪が更に重くなり、重罪人が暮らす地獄へ飛ばされてしまふぞ」

青年に言われても、由希子は一点を見つめたまま動かない。由希子の心は家に帰りたいと、ひたすらに願う。鬼の力を呼んでいるとも知らずに。

何も無ければ、なんの効力も持たない鬼の力。しかし、由希子の強い思いの影響を受けて負のエネルギーを帯びた鬼の力は、集まり增幅し、意思を持ち始める。呼ばれた力は姿を隠して静かに移動し、由希子の背後から忍び寄る。力が由希子の肩に手を置いた時、由希子の心の中で、低い声が優しく由希子を包み込むように響いた。

『由希子、鬼の力が欲しいか？ 現世に戻る力が』

『欲しい。だけど、あんな醜い姿になるのはイヤ』

由希子が呟くように言うのを聞いて、青年は焦つて由希子の肩を掴む。

「由希子。今、聞こえている声に、返事をしたらダメだ」

『姿など、鬼の力を使えば、どうにでもできる。鬼の力は、それほど偉大なのだ』

「でも、鬼になつたら皆に嫌われる」

『なんだ、そんな事か。くつくつく。鬼の力を使い人の姿で暮らせ

『いい。鬼だとバレさせしなければ嫌われやしない。心配するな』

青年は由希子の肩を揺する。

「由希子、声を聞くな。オレを見ろ」

由希子は顔を上げるが、目の焦点が合っていない。

「本当に大丈夫?」

『ああ、大丈夫』

「だったら欲しい。鬼の力をちょうどいい」

青年にただ向いているだけだった由希子の瞳の色が、こがね黄金色に光つた。

「由希子！」

青年の声が大きくなる。

女性の声が最悪の状態を告げる。

「鬼変率九〇%」

「いきなり九〇%だと！ 鬼変速度が早過ぎる。ダメだ、由希子」

「鬼変率九五%」

救急隊員は由希子から離れた。

青年は由希子から離れない。

「由希子、鬼の力に飲み込まれるな」

「パパ、ママ。私、もうすぐ帰るから」

由希子の額に角の先が現れ、増えた筋肉で体が膨らむ。胸も以前より膨らみセーラー服がきつそうだ。

「鬼変率一〇〇%。鬼一体を確認。過去の出現データ有り。涙鬼。

妖鬼レベル。装備、データ無しです」

青年は由希子を抱き締めた。

「由希子。どうしてこんな娘にまで

青年の声が泣き声になつていて。
「絶鬼の剣よ」

青年は空中に現れた剣を掴んだ。剣を持っている手が震えている。

「できない。あんたを切るなんて、オレにはできない」

由希子だつた鬼は、鬼になつても小柄でスマートな体型だつた。肌は青白く艶がある。伸びきつた角のある表情で青年を見て、剣を持っている青年の手に自分の手を重ねた。

「なら、私があなたに、してあげる」

由希子は青年の腕を動かして、なんの躊躇いも無く、青年が握っている剣を青年の腹に突き刺した。

一瞬の出来事で、青年は抵抗ができなかつた。青年は奥歯を噛み

締め痛みに耐える。

「ねえ、絶鬼の剣が自分の腹に刺さる気分はどう?」

「なぜ君が涙鬼なんかに。由希子」

「私は、気分がどうかと聞いているのよ」

由希子は剣を更に押して青年の腹を貫いた。

青年の絶叫が辺りに響く。

「そうよ。その声が聞きたかったの」

由希子は青年の胸を指でなぞる。

「なんて素敵な声なの。今あなたは人の姿なのに、鬼と同じ猛氣声をあげれるなんて、素晴らしいわ。それに、心の奥底で力強く燃える雷鬼の力。欲しい。私はあなたが欲しい。あなたと一つになりたいわ」

由希子は、雷鬼の力がある場所、青年の胸にキスをしてから顔を上げた。

うつとりとした魅惑の黄金色の眼差しで青年を見つめる。青年の背中から飛び出た刃から血が滴り落ち、血の気が引いた顔の、まだ赤みが残る唇を見つめ、濡れて艶を帯びた自分の唇を近づける。

青年は息を荒く吐きながら由希子の頬に手を当てた。鬼面になつてもあどけない由希子の顔を悲しげに見つめる。

「オレから雷鬼の力を吸い取るつもりなのか?」

由希子はハツとした表情をするが、すぐに眼を細めて、青年を見つめながら笑顔を作った。

「下品な言い方をしないで。私はあなたの全てが欲しいだけなの」顔を近づけて青年と唇を重ね合わせる。由希子は静かに瞳を閉じるが、直後に青年の胸を押して青年から離れた。

「融合できない。同じ鬼なのに、なぜ私と一つにならないの!?」

「オレを誘惑しても無駄。あなたの手の内は分かつて」

由希子の、涙鬼の妖艶な表情が強張る。

「涙鬼は、あんたで一度目なんだ。前の涙鬼は男だったが」

由希子の鼻から笑いが漏れる。何を思ったのか、手の甲で口元を

隠し、仰け反つて笑い出す。

「私も分かるわ。鬼の力つて便利ね。あなたの事まで分かつちゃう。
あなたは輪廻の輪から外れた存在。明王によつて地獄に繋がれた、
哀れな鬼なのよ」

由希子は鬼面で微笑む。

「私は、あなたとは違う。この鬼の力で現世に戻るわ」

「鬼は一度と現世へは行かせない。両親を思う気持ちが残つてゐる
なら、まだ間に合う。人に戻るんだ」

「イヤよ。無力な人間なんて大嫌い」

青年は由希子を捕まえる。

「由希子！」

涙鬼である由希子の瞳は、まだ高校生のあどけなさが残つてゐる。
しかし、瞳の奥は狡猾で妖艶な光が輝いてゐる。

「もしかして私が欲しいの？ いいわよ、あなたのものにしても」
「ああ、欲しい。欲しいが、オレは、人間の由希子を返して欲しい
んだ！」

青年の訴えに、涙鬼の瞳が憎しみを帯び、怨色の輝きに変わつた。
どうしても思い通りにならないという、涙鬼の鬱積された思いが表
情として表れた時、青年の手に稻妻が走つた。

「何をするの」

由希子の涙鬼の表情が歪む。

青年の手から発せられた稻妻は由希子を包んだ。

「オレが、あんたの中にある涙鬼の力を吸収すれば」「やめて、パパとママの所に戻れなくなる」

由希子は抵抗するが、青年の手は由希子から放れない。由希子は人へ変化し始めた。

「いや、せっかく手に入れた力を失いたくない」

由希子は青年の腕の中で暴れ、青年を振り払った頃には完全に人に戻っていた。現世に帰る術を失った由希子に、人としての感情が戻る。人の感情は鬼だった由希子を執拗に責めたてた。

「私、私は……」

泣きながら地面に崩れ落ちるようにしてしゃがみ、腰が抜けて尻を地面に落として座り込む。震えている自分の手を見た。

「私が人を刺すなんて」

あの時、剣の刃はなんの抵抗も無く青年の腹の中に入った。手に残っているその感触が気持ち悪く、おぞましい記憶となつて由希子を苛む。人としての感情が戻ったのはいいが、今度は人を刺した現実を受け入れなければならず、鬼になってしまったショックは大きいようだ。

青年は自分の腹から剣を抜いた。

「オレなら大丈夫。こんな傷はいつもの事だから。それに今のオレは、人であつて人じやない。だから、あんたが刺したのは人じやない。気にするな、由希子」

腹に開いた剣の傷が治癒して塞がっていく。

青年は由希子を気づかって手にある絶鬼の剣を消した。泣いている由希子に歩み寄る。

地面にひれ伏して泣いている由希子は、先ほど^{じかうで}の狡猾で妖艶な涙鬼とは思えないほど幼く見える。

「「めんなさい。あんな事をするなんて」

「あんな事に、キスは含まれているのだらうか。

「その……。初めての事で戸惑っていると思うが、地獄は罪人の集まり、争い事はよくあるんだ。それでオレのような地獄の番人がいるんだ」

青年が由希子に説明をしていると、歌が聞こえてきた。先ほどまで血みどろの争いがあつた地獄とは思えないほど、のん気で陽気な歌声だ。

「泣いてばかりいる子猫ちゃん。犬のおまわりさん。困つてしまつてワンワンワン。ワンワンワン」

一部始終を見ていた野次馬の中から神父の姿をした中年の男が現れた。神父は人を搔き分けるようにして野次馬の集団から出ると、ゆつたりと歩いて由希子に近づいた。

「どうも、こんにちは」

笑顔で挨拶をする。

由希子は泣き顔を上げた。

神父は胸の高さまで腕をあげて手を開く。そこに本が現れる。その本を開いて中にある文字を指でなぞつた。

「えつと……。あなたは^{ひろたゆき}広田由希子さんですか？」

「そうですけど」

由希子は返事をしてから鼻をする。

「よかつた。ずっと探していたんですよ」

神父は返事を聞いて喜ぶ。両手で本を閉じると本は手の中で消えた。何も無くなつた両手を差し伸べて由希子を立たせた。

「さあどうぞ。これをお受け取り下さい。我が主からです」

神父は懐から真っ白な羽を取り出す。由希子の手にその羽を握らせた。

由希子は自分の手より大きい羽を見る。羽は仄^{ほの}かに温かい。

「あの、これは？」

「天使の羽です。一回だけ願いを叶^{かな}える事ができます。現世のあなたは集中治療室で生死を彷徨^{さまよ}っています。生身の体が存在する今のうちに、その羽に戻りたいと願えれば、現世に戻る事ができますよ」

「本当なの？」

「はい」

神父の額^{うなず}きを見て、由希子は喜^うぶが、喜びの中に疑問が浮かぶ。

「でもなんで集中治療室に？」

「下校途中にバスが衝突事故を起こしたのです。ほかの方は意識が戻つたのですが、あなただけまだ意識が戻らない状態なのです」

青年が天使の羽を見て言う。

「そんで戻れるなんて、あんた、よっぽど現世での行いが善かつたんだな」

「私、何をやつたのか覚えてないけど、とにかく嬉しい。これでパパとママの所に帰れるのね」

「わたくしも迷える子羊をお救いする事ができて嬉しいです」

由希子は羽を握り締めた。

「天使の羽さん、お願ひ。パパとママの所へ連れてつて」

由希子の願いを聞いた羽は淡く輝き出した。

同時に青年が苦しみ出す。

「どうしたの？」

「なんでもない。あんたは早く現世に戻れ」

由希子の心配に、青年は笑顔で答える。額に脂汗を浮かせて青年は由希子から離れた。背を見せて歩き出す。

「天使の羽さん、ちょっと待って、今のお願いはキャンセル」

「キャンセル！？」

神父は、由希子の前に立ち、素つ頓狂な声をあげる。

由希子の言葉に天使の羽は輝きを失つた。

「本当にキャンセルされる!」

神父の驚きはまだ続いている。

「願いをキャンセルしたのは、あなたが初めてです。由希子さん、なぜですか？ 早く現世に帰らないと、あなたの体は本当に死んでしまいますよ」

「そうだけど、あの人……」

由希子は、青年の事を神父に聞いた。

「神父様、あの人はどうしたの？」

「なんとお話してよいものか」

神父の気づかいが由希子の直感を刺激する。

「私のせいなの？ ねえ、そうなの？」

由希子に詰め寄られて、躊躇とまどいながらも神父は口を開いた。

「あの悪魔は、悪魔になつたあなたを助けるために、あなたから魔の力を吸収しました。その前にも赤い悪魔から魔の力を吸収しますから、きっと彼の体に無理がきたのでしょうか？」

「悪魔！？ サっきは鬼つて」

「あなた方は鬼と呼んでいますが、わたくし達クリスチヤンは、角が生えおぞましい姿になつた者を悪魔もだと呼んでいるんです」

青年はいきなり倒れた。苦しみ悶え、姿はまた雷鬼らいきに変化する。

そしてまたあの声が。

「鬼変率九五%」

「ちよつとなんで？ あの人は地獄の番人なのに」

由希子は姿無き声に向かつて言つ。

野次馬からは、恐怖の声があがる。

「あいつ悪鬼になるぞ」

「地獄の番人が悪鬼になつたら大変だ。この辺り一帯が血の海になるぞ」

青年は地面に手をついて体を起こす。

「冗談じゃない、誰が悪鬼になるものか。あと一体、悪鬼を倒せば、オレは輪廻の輪に戻れるんだ。絶対に悪鬼になるものか」

青年は心に届く声と鬪っているようだ。

神父は遠目で雷鬼を見る。

「ほう、彼はわたくしと同じ、科せられた者のかのようですね」

「科せられた者！？」

由希子は神父を見た。

神父は神に使える者。なのに、神父も科せられた者とは、どういう事だろうか。

「現世のわたくしは牧師ぼくしでした。教会に懺悔ざんげをしに来る、迷える子羊の話を聞くのが役目だったわたくしは、自分の利益になる子羊には手を差し伸べ、利益にならない子羊には手を差し伸べなかつたのです。お陰で、現世での生を終えたわたくしは、地獄に送られ刑を科せられました。由希子さんのように、生きながらにして地獄に来てしまつた人を現世に戻すようにと。我が主から頂いた、願いを叶える天使の羽は五十枚。わたくしは五十人の迷える子羊を現世に戻さなければ、人として生まれ変わる事が許されないので」

神父は、地面で苦しみのたうちまわつて、青黒い鬼となつた青年を見る。

「彼の場合は、悪魔になつてしまつた者を神の下むとへ送らないといけないようです。当然、悪魔は彼の言う事を聞かず、彼の持つ力欲しさに挑んで来るでしょう。そんな悪魔と闘わなければならぬ過酷な条件を科せられるとは、彼は生前にかなり重い罪を犯したようですね」

「鬼変率ひへんりつ一〇〇%」

一〇〇%となつた時、雷鬼らいきは急に動かなくなつた。一瞬だけ静寂が広がつたが、次に雷鬼はゆっくりと身を起こした。口から涎よだれをたを垂らしながら立ち上がる。体の表面がバキバキと音を立てて、皮膚が硬い鱗状ひきょうに変わつていく。それを喜ぶかのように、雷鬼は拳を振り上げて空に向かつて吼ほえた。

「鬼変率ひへんりつ一一〇%」

神父は胸の辺りで十字を切る。

「ああなるともうダメですね。主よ彼の御靈みたまを救い給え、アーメン」「そんな」

悲愴感を浮かべて言う由希子の前で、雷鬼は手を広げた。

「絶鬼の剣よ」

雷鬼の手に絶鬼の剣が現れる。雷鬼は絶鬼の水色の刃を見た。

「結局、生きている時の繰り返しなのか……」

雷鬼は笑う。

「ははは、ふはははは」

青年の笑いは暫く続き、神父は全身を淡く光らせる。

「あの者は狂い始めたようです。由希子さん、天使の羽を使って早く現世に戻つて下さい。わたくしは地獄の番人として、あの者と戦う事になると思いますので」

神父の口調がきつくなる。のん気に歌っていた神父とは大違ひだ。雷鬼の体は、鱗状の皮膚がささくれ立つて刃物のようになり、鋭利な刃を持つた鎧をみにつけているようだ。青年だった雷鬼の笑いはまだ続き、ガラス細工のような半透明の絶鬼の刃に、醜くくなつてしまつた青年の、雷鬼としての顔が映る。雷鬼は笑いをやめて金色の瞳で刃に映つた自分の顔を見ていたが、暫くして黃金色の瞳から涙がこぼれた。

「生きていた時は正義の名の下に人と闘い、地獄に落ちれば悪鬼の肅正という大義名分の下で人だった鬼と闘う。生きていても、死んでいても、結局は同じ。オレは闘う宿命から逃れられない。そして最後も同じ」

雷鬼は絶鬼の刃先を自分の胸に向ける。手に力を入れ心の臓を貫いた。剣を掲んだ姿のまま、雷鬼の体は地面に横たわつた。

余りにもあつけない雷鬼の最後。周りにいた人々の誰が、雷鬼の自決を予期しただろうか。

由希子も、またその中の一人。

「あの人はどうなつたの？」

由希子は神父に聞く。彼の死を受け入れられないのだ。

「あの悪魔は地獄での生を終えました。普通なら、彼の御靈は神の下へ召され、過酷な試練を受けてから再構成され、また輪廻に戻さ

れるのですが、そのままの状態を見ると、それも許されないようですね」

由希子は雷鬼に歩み寄った。

「なんで、なんでなの。悪い鬼を倒して私を助けたわ。きっと、その前も、その前も、悪い鬼を倒してきたんでしょ。私も鬼だつたけど、まだ人に戻れるつて教えてくれたわ。善い事もしてるじゃない。なんで神様はこの人の罪を許さないの？」

由希子は空を見上げて泣き出した。

「なんで許してくれないの。せめて人の姿に戻してあげてよ」

刃物のようにささくれ立つていて雷鬼に触れることができず、由希子は雷鬼の傍で泣く。

神父は由希子の隣に腰を下ろした。

「地獄で善いを行いをしても拭えないほど、生前の罪は重いのでしょうか？」

由希子は握っている天使の羽を見た。

「確かにこの羽って、私の願いを叶えてくれるのかな？」

「それはダメです。願いを叶えたらその羽は消えてしまします。あなたが現世に帰らないと、ご両親が悲しむと思いますよ」

神父の言葉を聞いて由希子は眼を閉じる。

「パパ、ママ……」

「そうです。ご両親の下へ戻つて下さい」

神父が安堵の笑みを浮かべた時、由希子は眼を開いた。

「パパ、ママ、『めんなさい』。天使の羽さん、お願ひ。彼を生き返らせて」

「由希子さん！」

慌てふためく神父の前で、由希子の手の中の天使の羽は再び輝いた。

天使の羽は由希子の手から離れ、分散して小さな羽根になり、雷鬼を包み込んだ。羽は一つの輝きの塊となり、その輝きが弱くなつた頃、中から人に戻つた青年が現れた。服は以前と変わりなくボロボロだが青年にあつたアザと返り血は消えている。

「ふう」

横たわつている青年の口から呼吸が漏れた。

「生き返つたわ」

「由希子さん、何て事を……」

喜ぶ由希子の隣で神父は頭を抱える。

青年は瞳を開いて、ゆっくりと体を起こした。翡翠の曲玉が胸で

揺れてぶら下がる。

「なんで生きているんだ!?」

青年は自分の体を見ている。

「良かつたあー」

由希子は青年に抱きついて涙を流した。

神父は疲れ切つた表情で、事の経緯を青年に説明した。

「彼女があなたを生き返らせたのです。お陰でわたくしは彼女を現世へ送り届ける事ができませんでした。この事が我が主に知れたらと思うと、わたくしは気が遠くなりそうです」

青年はそつと由希子の腰に腕をかけて優しく抱いて頭を撫でた。

「あんたは相当なお人よしだな」

由希子は涙を拭いながら笑顔を作った。

また女性の声が響く。

「幽鬼神レベル、雷鬼。百八体の悪鬼の肅正を確認。刑の終了です。これより輪廻の輪に加わる事が許されます」

そして緩やかな風が吹いた。その風でデパートの火事の炎が消えていく。消防隊はこの不思議な現象を見て、消火ホースを持ったま

ま棒立ちになつた。

野次馬も今起こつてゐる不思議な現象を静かに見てゐる。

由希子も不思議な風に気付いて顔を上げた。

「風が気持ちいい。なんか癒されるつていうか」

「奴らのお出ましだ」

青年は空を指さして見上げる。

「奴らつて？」

由希子も空を見上げる。

空に人がハ人浮かんでいた。淡い光に包まれながらゆつくりと降りて来る。ハ人は地面に素足をつけると、納衣^{のうえ}を揺らしてゆつたりとした身のこなしで歩いて青年に近づいた。彼らの身を包んでいた光は消えていく。ハ人は青年を取り囲んで見下ろした。

「自身の中の悪鬼を倒し、百八体としたか」

その内の一人が、首の向きを変えて由希子を見る。

「ふむ、どう見ても普通の娘^こに見えますね」

由希子はじろじろと見られても黙つていたが、心中では「美形がハ人もいる！」と騒いでいた。

「奴らはハ^{はち}大童^{だいとう}子だ」

青年は小声で由希子に教える。

「何それ？」

由希子が聞いていたうちに、空からまた人が光に包まれて降りてきた。

今度は美形が四人。地面に素足がつくと早速由希子に近づく。

「この娘ですか」

「巫女にも見えませんね」

青年は口を開いた。

「おい明王、どういう事だ」

空から降りてきた四人は明王達のようだ。

童子の一人がどすの利いた声で言つ。

「呼び捨てるとは、なんと無礼な！」

「よい」

明王の一人が手を肩まであげて、童子を制止する。

「いや不動君がね、この娘の事を言うのでね」

四人の明王はそう言つて顔を見合させる。

「あなた方は、私の決定が気に入らないのですか？」

と、今度は空から声がした。

由希子はまた空を見上げる。その声の主は一人で空に浮き、また光に包まれて降りて来る。

「あれが不動明王だ」

青年は由希子に言う。

由希子は地面に素足をつけた不動明王を見て「キヤー、カツコイイ」と心の中で叫んだ。

不動明王は由希子に近づく。

「実は弥勒君から君を現世に戻すように頼まれまして。でも君はここにいる事を望んだ訳ですし、私達の間で君を現世へ戻すかどうか意見が分かれてね」

由希子が半信半疑で聞いていると、不動明王はにっこり笑顔になる。

「いろいろな意見が出ましたが、結局、ぼくが現世に戻すって決め

ちやつた

四人の明王が不動明王の横に並ぶ。

「いつもの事ながら、その不動君の強引さ。なんとかして預けませんか？」

「僕は不動君と同意見だよ」

「彼女を戻すなら、せめて地獄での記憶を消してからでないと」

「地獄に来た者を、輪廻の法則に反して、現世に戻すのはどうかと」

四人の明王は、まだ不動明王に意見している。

由希子は目が点になつた。明王といえば威厳に満ちた神の姿が思い浮かぶ。だが、目の前にいる明王は美形のアイドルにしか見えないからだ。

神父が由希子に言う。

「あなたは、我が主だけではなく、ほかの神からも愛されているのですね」

「え！？」

由希子は神父の顔を見る。

「もしかして、私はパパとママの所に戻れるの？」

「そうみたいです」

神父は由希子と眼が合ひ微笑む。

「由希子さん」

今度は不動明王に呼ばれ、由希子は見上げる。由希子に不動明王の手が近づく。不動明王は、今から由希子を現世に戻すつもりのようだ。

「ちょっと待つて。戻る前に、私、聞きたい事が」

だが、由希子の意識は遠退きはじめる。由希子は手を伸ばして不動明王の納衣を掴んだ。

「お願い待つて」

この言葉を最後に、由希子は気絶した。

次に気付いた時、由希子はベッドに横たわっていた。

「あなた、由希子が気付いたわ。あなた、あなた」

父親を呼びに行つた母親を見て、由希子は現世に戻つた事を知つた。同時に、由希子の脳裏にバスがトラックと衝突横転し、一緒に乗つていた友人と自分が横転したバスの中で揉みくちゃになつた映像が蘇る。由希子は思い出せなかつた空白の部分を思い出した。

退屈な入院生活のあと、由希子は無事に退院した。強打による頭部の亀裂骨折と脳内出血になつていた由希子だつたが、今のところ後遺症は無く、奇跡的にこの程度で済んで良かつたと医師は何度も由希子に説明した。

で、由希子は今どうしているのかといつと。

「退院してすぐテストだなんて……」

溜め息を吐きながら高校で授業を嫌々受けている。

日本史の教師は若い男性で、プリントをみんなに配る。

「もう授業が終わる時間だが、時間が少し余つたのでテスト勉強の息抜きついでに、最近話題になつていて、この話でもしようか。朝のニュースを見て知つてる者もいると思うが、飛鳥時代と思われる古墳内で発見された、眠る翡翠の剣士の名前が分かつたそうだ」

教師はプリントを配りながら言つ。

「そういえば広田さんは知らないかな。広田さんが入院中に、古墳が見つかってね。新発見という事で大ニュースになつたんだよ。古墳には剣を胸に抱いた男性の亡骸が眠つていて、首に翡翠の首飾りをしている事から翡翠の剣士と呼ばれているんだ。胸に大きな刺し傷があり、それが元で若い頃に亡くなり埋葬されたらしい」

渡されたプリントには、発見された古墳と埋葬された翡翠の剣士の写真画像があつた。

白骨化したガイコツ顔の剣士は長い髪を後ろで一つに留めていた。

胸に抱いていた剣は錆びて変色しているが模様などの装飾が施されているのを見ると当時は高価だったに違いない。剣士はそれ相応の身分のある者だろうか。次に、剣に寄り添つてある翡翠の曲玉を見た。

「これは！」

由希子は声を上げる。

教師は由希子を見る。

「どうした、広田さん？」

由希子は教師の声で授業中に無用な声を出してしまったと気付く。

「いえ、なんでもありません。すいません」

俯いた由希子に教師は笑いながら言つ。

「これはテストに出ないから、そんな真剣に見なくてもいいわ」

教師の言葉に、ほかの生徒は笑う。

由希子は、皆の笑い声を聞きながら亡骸の胸にある翡翠の曲玉を見ていた。曲玉の色は緑白色で、ねじれて紙縫りのようになつた布が通してある。

それは間違いない青年の胸で揺れていた曲玉だった。

「古墳の中には、壺に『藤原正前』が黄泉の国で食べ物に困らないように』と文字がある事から、翡翠の剣士の名前は『藤原正前』の可能性が強いそうだ。まだ調査中だが、いずれ大化の革新に関わった武将、もしくは武士として『藤原正前』が教科書に載るかもしれません」

そして授業の終わりを告げる鐘が鳴り響いた。

「では、終わるか」

教師の声で生徒に号令がかかり、皆は教師に一礼をする。教師は教室を出て行き、生徒は帰り支度が済んだ者から教室を出て行く。そして、由希子の友人も帰り支度をして由希子の所にやつてきた。

「由希子、帰る」

友人の腕の、バスの衝突事故でついた傷跡が痛々しい。

「順子、ごめん。今日は病院に行く日なんだ」

「なら、途中まで一緒にいひ

「うん」

由希子はカバンを持って順子と教室を出た。

順子は廊下を歩きながらロングヘアを手で梳すく。
「翡翠の剣士って、なんか恰好いいよね」

「そりかな」

由希子は青年の顔を思い出して答える。

順子はうつとじとした表情をする。
「きっと結婚の約束をした彼女がいて、その人を残して戦地に赴いたんだわ」

順子はコースの影響で翡翠の剣士の妄想が膨らんでいた。

由希子は、彼女がいるように見えなかつた、と思いつつ言ひ。

「彼女いたのかな」

「いたわよ。だつて昔の人は結婚が早かつたもの」

「じゃあ、奥さんがいたかもよ」

「ええー、そんなあー」

由希子の言葉に、順子はがつかりした表情をするが、気を取り直して静かな表情で一緒に歩く由希子を見た。

「なんか由希子って、事故で入院している間に大人になつたよね」「そう?」

「だつて、以前の由希子だつたらすぐ話題に乗つてきて、私以上に騒いだじやない。今の由希子は現実を見るよつになつたつていうか、冷静に判断してから言つよつになつたよね」

「そんなつもりはないけど、やっぱり怖い目にあつと変わつちやうのかな」

由希子は下駄箱で靴を履き替える。

順子も靴を履き替えながら言ひ。

「私もママから、事故のあと変に大人びた。って言われるもの。それが老けたつて言われているよつで、イヤでイヤで」

「それ、分かる」

由希子も同調した。

順子は携帯の時計を見る。

「あ、そろそろバスが来るから行くわ」

「うん、またね」

由希子は順子に手を振る。

順子も手を振ると、バスが来る時間がすぐなのか、バス停へ走つて行つた。

由希子は一人になり、ゆっくりと歩く。いつもなら順子と同じバスで下校するのだが、退院して間もない由希子は、退院後の体調はどうか病院で検査を受けるべく、地下鉄の駅に向かつっていた。

入院中も、退院してからも、由希子は暇ができると地獄での出来事を思い出していた。人並み外れた美形の八大童子。図書館で調べると、八大童子は明王や菩薩の使者の役割をしている神様らしい。明王も東西南北に座す四人の明王と、中心の不動明王を合わせて五大明王とされているようだ。不動明王は由希子も地獄で会つてゐるが、由希子が知るどこかの寺の不動明王は天地を見つめ、美形には程遠い威厳に満ちた表情をしている。そして、由希子の目の前で闘いを繰り広げた、赤鬼と青鬼。あれは本当の出来事だつたのだろうか。入院中、意識が混濁していたせいで見た夢ではなかつたのか。そこで出会つた青年も。

目覚めたばかりの頃は、由希子の心にも順子のような甘く切ない思いがあつたのだが、今の由希子は溜め息を吐く。

「初恋だつたのに……。やつと名前が分かつたと思ったら、白骨化した飛鳥時代の人だなんて」

青年が飛鳥時代に実在していた事実は、由希子には苦い現実のようだ。

「墓の中のガイコツの写真をもらつても、好きな人として部屋の写真立てに置けないじゃない」

由希子は、ガイコツの青年が入つた写真立てが部屋にあるのを想像して、表情を歪ませる。それでも、大切にガイコツ写真を持つて

いようと思つ由希子は、未練たらたら。大好きな相手が手の届かないガイコツと分かつても、地獄で青黒い鬼として鬪つていた青年の、火事の中で由希子の手を引いて走つていた青年の恰好いい姿がロマンス映画のように美化されて、今も鮮明に由希子は思い出し、簡単に断ち切れない思いが込み上げていた。

そして地獄で何回も聞いた輪廻転生の話。^{じんねてんじょう}これも夢の中の話だつたのだろうか。

「輪廻の輪に戻つたあの人は、現世では赤ちゃんとして生まれる訳だから、さつと記憶はリセットされて、私の事は覚えてないよね」あれは夢だつたと思いつつも、学校の図書館でちやつかり輪廻転生を調べていたりする。

由希子は地下鉄の駅への階段を下りる。

「地獄もこつやつて自由に行き来できればいいのに」勝手都合な事を考えながら階段を下りていると、視界の端に白のシャツと青いジーパンが映つた。由希子の瞳は見覚えのあるシャツとジーパン姿の男を見据える。

「あー」

階段を下りる由希子の足が早くなる。

「夢じやないかも」

男の胸には翡翠の曲玉もある。

「夢じやない」

由希子が男の前に来た時、男は笑顔で口を開いた。

「よう、久し振り」

出合つた時と変わらない姿の青年が壁にもたれて立つていた。

「なんでここに?」

青年は苦笑いを浮かべる。

「オレに刑を科したある明王が、事もあるうに厄介な悪鬼を現世に逃がしてしまつてね。本来なら輪廻の輪に加わるべきオレだが、明王の依頼でその悪鬼を捕まえに来たつて訳」

由希子の顔に笑顔が戻る。

「それ本当なの?」

「何を喜んでるんだよ」

青年の顔が険しくなる。

「オレが捕まえに来た悪鬼はあんただよ」

青年は由希子の腕を掴む。

「え！」

由希子の喜びが一変して恐怖に変わる。

「まあ、捕らえるのは涙鬼になつて悪さをしてからだが」

青年は由希子を引き寄せると抱き締めた。

「それまでは、由希子を見守つてやれつてさ」

由希子は青年に言われて眼に涙を浮かべる。

「そういう事は先に言ってよ。お願ひだから」

全身の力を抜くと青年に身を委ねた。

終

あとがき（前書き）

注意

本編に関するネタバレが書いてあります。
知りたくない方はご遠慮下さいませ。

あとがき

「涙鬼」を読んで頂き有り難うございます。

「涙鬼」は2007年度 cobalt ノベル大賞に応募し、一次予選に残らなかつた作品です。

応募締め切りは2007年7月頃だつたと思います。

それを「小説家になろう」に載せるために推敲し直しました。

「涙鬼」の話の元となつたのは、私の夢です。

普段の私は、火事の夢はあまり見ないのですが、あの時の私は数日間、就寝するたびに火事の夢を見ていました。

夢を見せられていたといつたほうが正しいのかもしません。夢の最初は、火事で逃げていた男女が出会つところから始まり、逃げている途中で出会つた人々が鬼と化して男女に襲いかかり、最後には火事で逃げていた男女が生き残るために鬼になり、一つしかない出口から逃げ出すために、誰が出口から一番先に出るかで争い殺しあつていきました。結局、男女は戦いながら出口を通つたのですが、そこで夢が終わつてしまつたので、男女がその後どうなつたのかは知りません。

夢では生き残るために青年が「鬼になれ」と由希子に言つていました。応募した作品は、夢に近いストーリー展開で、青年が由希子に「鬼になれ」と言い、由希子はその事に困惑しています。

「小説家になろう」の「涙鬼」は、由希子を唆すのはやはり悪役が一番だらうと思つたので、夢とは違うストーリー展開にしてみました。

由希子が襲われる場面も、cobalt に応募したものより描写が具体的になつています。

鬼の話でしたが、楽しんで頂けたでしょうか？

今後の参考にさせて頂きたいので、感想・評価をお寄せ頂くと幸いです。

しばらくの間、賞の応募のため「小説家になろう」での活動を休ませて頂きますが、終わったらまたここに戻ってきます。

予選落ちした作品を掲載するために。（笑）

そういう訳で、今後も雲霧を宜しくお願ひ致します。

では、またお会いできるその日まで。

鴨一雲霧

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5138d/>

涙鬼-r u i k i-

2010年10月8日15時36分発行